

「モーションギャラリー」にて

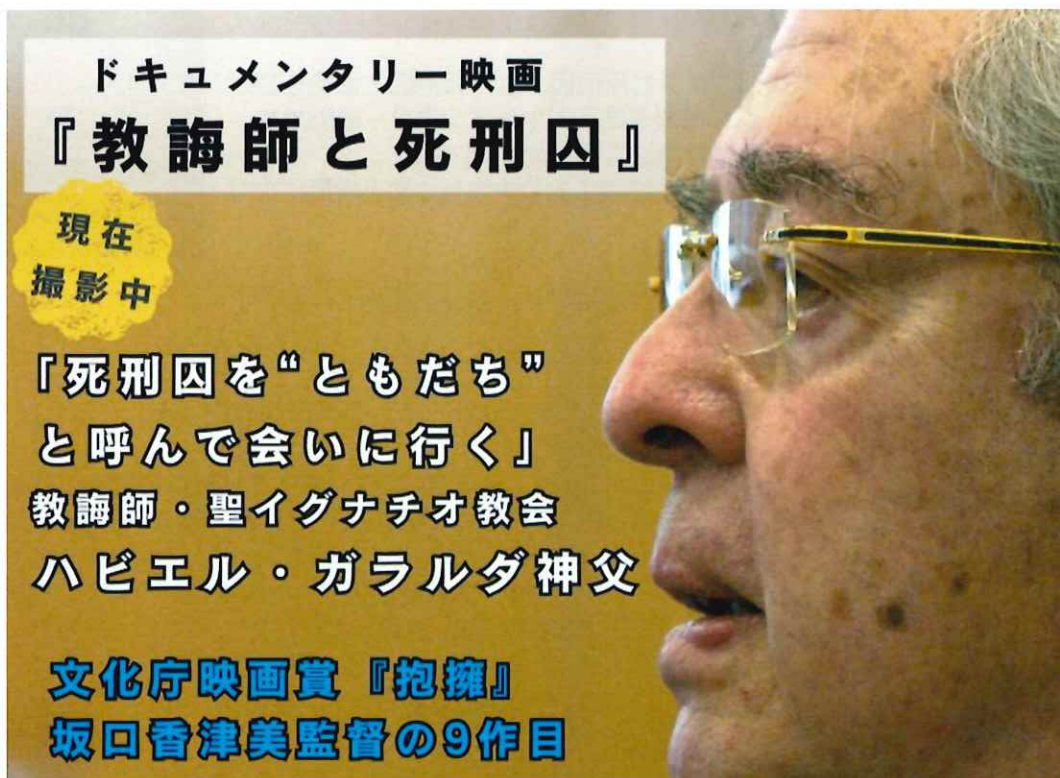
クラウドファンディング実施中！



国内初、死刑囚の心を見つめる教誨師のドキュメンタリー

『教誨師と死刑囚』

～文化庁映画賞『抱擁』、『凱歌』の坂口香津美監督最新作



死刑囚にとって、教誨師の存在が、唯一無二、最後の心の拠り所であり、特別な存在であり続ける。

人間とは何か、罪とは何か。

そして、罪を償うとは何か。

映画を見終わったあと、無性に誰かと話したくなる、共有したくなる。

死刑制度の存置する日本で、教誨師として死刑囚と向き合う94歳のスペイン人神父の視点を通じて、罪と罰について、考え、問いかける作品です。

映画の完成に向けて、みなさまのご支援をお願いいたします。

▶詳細はサイトよりご確認ください。

<https://motion-gallery.net/projects/kyokaishi>

実施期間：2025年12月20日（土）～2026年4月17日（金）まで



（法学監修）新倉修（弁護士／青山学院大学名誉教授）

（製作）株式会社スーパーサウルス

東京都港区南青山2-2-15-942

<https://supersaurus.wixsite.com/supersaurus>

担当／落合篤子（プロデューサー）



SUPERSAURUS

ドキュメンタリー映画『教誨師と死刑囚』とは

国際的に廃止の潮流のある中、世論調査では国民の8割が死刑制度を容認する日本。本作は、存置国として、一人の教誨師を通して、死刑の在り方を見つめる映画です。

東京都千代田区麹町にあるカトリック東京大司教区の聖イグナチオ教会ことカトリック麹町教会の協力司祭、ハビエル・ガラルダ神父は、2000年から小菅の東京拘置所で、教誨師として定期的に日本人の死刑囚と面会活動を続けています。

死刑確定囚の心を支える教誨師の活動を撮影した、国内初となるドキュメンタリー映画です。

長期間、ハビエル・ガラルダさんの教誨活動を撮影することで、映画が伝えるのは、取り返しのつかない罪を犯した死刑囚の今と、死刑制度を有する現代日本の罪と罰の向き合い方です。

面会直後の撮影に応じる、ハビエル・ガラルダさんの発する言葉や表情からは、限られた時間、ガラルダさんが「ともだち」と呼ぶ死刑囚と共有した濃密な心の交流の証が、体温のように感じられます。

監督から

日本には死刑制度が存在します。本作『教誨師と死刑囚』は、死刑囚と面会を続けるひとりの教誨師の姿を通して、罪と罰、命の尊厳を問うドキュメンタリー映画です。

日本社会に深く根を張る死刑制度。なぜその存置を容認し続けるのか。

一人ひとりが、その問いに考えをめぐらし、人間の真のあり方を見つめる映画になります。——坂口香津美（監督）



死刑囚を“ともだち”と呼んで会いに行く 教誨師 ハビエル・ガラルダ神父（聖イグナチオ教会）



教誨（面会）で会う死刑囚のことを、私は「ともだち」と呼んでいます。

私は、2000年から今日まで、東京拘置所の教誨師として、計5人の“ともだち（死刑囚）”と教誨（面会）を続けてきました。

その間、2人の刑が執行され、2人は病死しました。

現在は、男性死刑囚1人と月に1回、面会でお会いしています。彼（男性死刑囚）は哲学が好きでよく本を読みます。

ナチスの収容所から生還した精神科医が書いた「夜と霧」を読んだあとの気付きについて、私に話しました。

「自由がなくても、生きる意味を選ぶことはできます」

彼は、罪から逃げたり、境遇に文句を言ったりするのではなく、勉強することを選んだのです。

面会する死刑囚については、個々にどんな事件を起こしたかについては、私はあえて知らないようにしています。死刑について話すこともありません。家族や知人と縁が切れ、対話できるのは私だけだからです。

彼らとは友人として接してきました。死刑囚のなかには、教誨を受けない人も多く、そうした人の中には、あるいは反省がない人もいるかもしれません。

しかし、私が今、会っている男性は、私の目には十分改心していると映ります。拘置所での生き方、物事の考え方、全体の態度で分かります。

私はこれまで、過去に一度、執行の現場に立ち会ったことがあります。

前日の夜に連絡があり、翌朝、拘置所へ赴きました。いつもと同じ教誨室で30分間、ミサを執り行いました。その死刑囚は、しっかりと聖書を朗読し、パンを口にした後、刑場の方へ向かいました。

さらに、死刑囚は、私と5分間話した後、顔を布で覆われて執行する部屋へ入りました。私は、執行の瞬間は見届けていません。しばらく待った後で、遺体となった彼と対面しました。拘置所の幹部が、全員そろって簡単な葬儀をし、献花をしました。

死刑制度は、終わらせてほしい。被害者遺族が本当につらい思いをしているのは分かります。ただ、私自身は、死刑は「間接的な復讐」で、“深いところの自分”はそれを望んでいないはずだと考えているからです。イエス・キリストは「敵を愛しなさい」と言いました。最初は憎しみで余裕がないでしょう。しかし、時間が経ち、少し落ち着いたら、その時には選ぶことができるのではないのでしょうか。復讐の道を歩き続けるか、死刑囚のため祈る道を歩くのか。

これからも私は、この日本で、これまでのように、死刑囚との面会を続けたいと思います。

ハビエル・ガラルダ（Garralda, Xavier）

聖イグナチオ教会（東京）協力司祭。カトリック司祭。1931年マドリッド（スペイン）生まれ。1948年イエズス会入会。1956年、コンプルート大学大学院哲学研究科修了。宣教師として来日し、1964年聖イグナチオ教会で叙階、上智大学助教授、神学部教授、1977年上智大学社会福祉専門学校校長、2002年上智大を定年退任。1994年から東京の府中刑務所で、主にスペイン語や英語を話す外国人受刑者の教誨師を務め、2000年から東京拘置所で、教誨師として日本人の死刑囚と面会を続けている。著書に「自己愛とエゴイズム」（講談社）、「自己愛と献身：愛するという意味」（講談社）、「愛を見つめて 高め合い、乗り越える」（集英社）など。2018年、瑞宝小綬章受章。

（ハビエル・ガラルダ神父ホームページ）https://jesuits.or.jp/j_garralda/biography/